

フィールドとともにできること エチオピアにおける产学・文理連携の地下足袋協創研究をめぐって

田中 利和（東北大学）

エチオピアに実存する「人・素材・技術」によって作られる「地下足袋」のことをグローバルな文脈ではEthio-tabi(エチオタビ)、同国内のローカルな文脈ではWoliso-tabi(ウォリソタビ)と本研究では呼ぶこととする。2018年10月、発表者の調査地であるウォリソの街において、木綿、革・古着デニムなどの素材、製靴技術、人びとのアイデアを組み合わせたエチオタビの製作・販売の体制が整った。このことは、エチオピアの在来履物文化と日本の地下足袋文化がフィールドワーカーの働きかけにより融合し、新たな形で創造されつつある過程と考えることができる。本研究の目的は、地下足袋を協創(=協働で創造)する実践の特質を、当事者意識をもつ研究者が参与する過程を通じてあきらかにすることを目的としている。

本発表では、フィールドを「調査地」・「学問分野」ととらえ、参与観察をおこなう研究者が「フィールドとともにできること」を考察することを目的とする。知を駆使して様々な社会活動に実践的に関与するといった類似の関心はこれまで多くの研究者が、応用人類学、公共人類学等として表明、あるいは実践してきた。このような学問分野の有用性の議論をふまえたうえで、発表者のエチオピアにおける地下足袋の協創研究を事例に検討する。具体的には、本研究の着想と発展のプロセスを述べたうえで、日本の地下足袋会社との個人的な「产学連携」を紹介し、今後取り組む予定である「文理連携」の共同研究を展望する。

発表者は2007年よりエチオピアのオロミヤ州南西ショワワ県ウォリソ農村部を調査地とし「牛耕」をテーマに参与観察をはじめた。農民と同様に裸足で牛耕を試みたところ、土塊が足を傷つけ苦痛を伴った。現地既存の靴などの履物では粘性の強い泥にはまり、足がとられた。そこで、翌年日本の地下足袋を持ち込み装着することによって問題を解決した。それは同時に農民達にとっては地下足袋という未知なる履物の遭遇でもあった。「牛の足」や「私達の足も痛い」「欲しい」という言葉をはじめ、問い合わせが殺到した。

日本伝統の履物である地下足袋は大正時代にゴム底に木綿製の足袋を接着することによって考案されたのが起源とされる。親指が独立に別れた二股構造で地面を掴む裸足に近い感覚の動作ができ、軽量で履き心地がよいのが特徴である。炭鉱や農業、建築現場で労働者の足を護ってきたのみならず、祭事や、近年はファッションの文脈でもヨーロッパ、ロシア、アメリカで人びとの足を彩るあらたな活躍の場がある。

キーワード エチオピア フィールドワーク

世界各地で独自に育ちはじめている地下足袋の土壤を培ってきたのは日本の地下足袋産業界である。2019年に創業100周年を迎える岡山倉敷の老舗「丸五」は、同業界を牽引してきたパイオニアである。伝統的な労働向け地下足袋に加え、現代社会の需要とあつた、運動や寛ぎをテーマにした地下足袋の開発・販売もおこなっている。発表者はメディア・研究者の縁を通じて、2016年8月22日に「丸五」と個人的な「产学連携」を結ぶことができた。ウォリソ農民の試用地下足袋と、製作に関する技術情報、地下足袋製作の核で、丸五の遺伝子ともいえる鑄型(ラスト)を見本として共有してもらった。さらにはQ's カフェというトークイベントで、地下足袋を参加者とともに考える機会も設けることができた。

発表者は「丸五」との連携による地下足袋と情報をフィールドの使い手の農民と、作り手である職人に共有してきた。そのなかで、農民の牛耕時の足を怪我疾病から護ることを目指すからはじめ、軽量で裸足感覚と強度を備え、肌さわりよく、心地よい、革のエチオタビを製作するに至った。それは、様々な用途にも順応する世界が望むデザインの装飾品かつ労働履物を目指す協創の実践的研究として発展してきたといえる。経過として2018年10月に、「足を彩り護る」ことを目指した合計200足の革と布製のエチオタビが完成し、ウォリソの人びとの祝福をうけ、テスト販売をおこなった。

事業としての課題は、泥との相性の確認、ゴム底の接着の強化、知名度をあげる宣伝戦略、女性用サイズの展開がある。この点は「丸五」の100年の歴史的蓄積に解決の糸口はあると考えており、知の連携を通じて調査地の文脈に沿った解決策を考え試みたい。

あわせて、研究としての課題は、これまでのフィールドの経験をもとに範囲を広げ、エチオタビの特性と意義を深く突き詰めることだろう。発表者は裸足による疾病、健康と運動について分析する医学と、生体・健康情報を測る材料工学の若手研究者との文理連携の共同研究チームを組織した。今後は足を彩り・護り・「測る」エチオタビセンシングの協創にも取り組む予定である。

フィールドワーカーが「フィールドとともにできること」はあるのか。1つの可能性は調査地・学問分野フィールド「内」の人びとの関係を育むなかで課題を共有することだろう。そして、解決にむけ、人・素材・技術を集めブレンドするように働きかける実践を吟味することでもある。また、フィールド「外」との接触と、共通課題の調整によって「ともにできそうなこと」を試みるなかで、具体的にわかることがあると考えている。

地下足袋 実践 協創